◆連載 いま留萌むかし 第三十三話

●留萌最初の都市計画

ここに留萌で見つかっている中で一番古い地図がある。明治二十四年（一八九一）七月調製とある。ちなみにこの年の留萌の人口は一千四百四人である。この地図がなんのために作成されたかを知ることが留萌の生いたちを考える上で重要な意味をもっている。一口でいうならば留萌最初の都市計画図ということができるのである。新市街地造成のために作成されたのである。

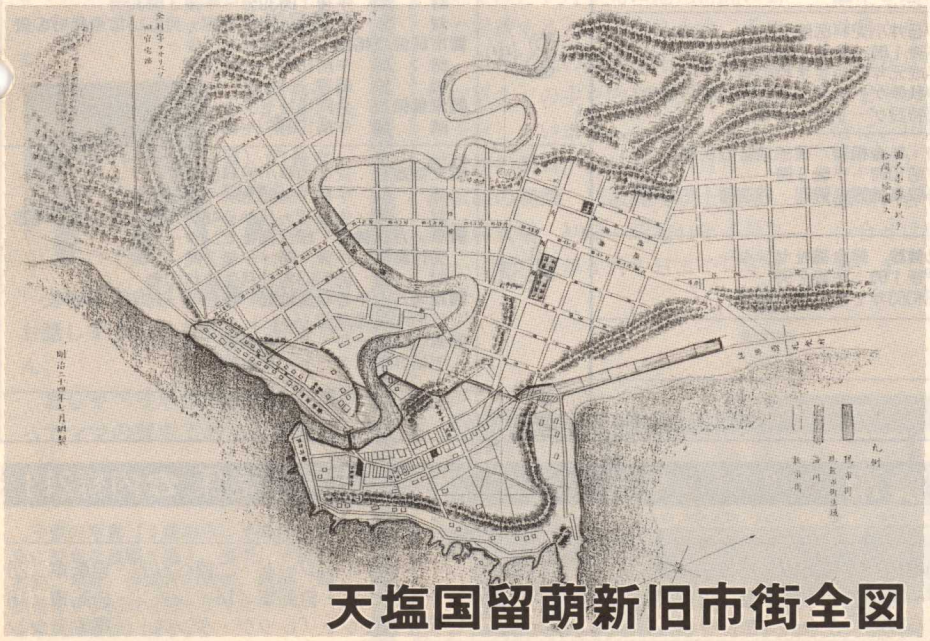
留萌は当時まだまだ北海道の西海岸の一寒村にすぎなかった。しかし、当時の留萌人はこの留萌を発展させようと日夜努力をかたむけていた。この新市街地造成計画は明治十八年頃から始まったといわれている。留萌村有志の間で積極的に論議がされ、実際の北海道庁への嘆願手続き等は以前郡書記をしていた中城長直が中心になっておこなわれた。しかし、道庁から市街地の略図をつけなければならないといわれ、足踏みで測量し、三から四回願書を提出したが時期尚早との理由で却下された。明治二十一年には郡長一柳平太郎が道庁へ赴いた際に長官へ陳情し、よい感触を得た。これに勇気づけられた有志たちは明治二十三年に留萌新市街開さく組合を設立し、本格的に運動をはじめた。委員長には長尾甲斎、事務員には藤田隆造、元戸長の伊山徳次郎などが就任し、事務所を旧市街の正覚寺に置いた。そして、明治二十四年十月三十日付で念願の北海道庁長官の許可をえることができた。

この許可がおりた背景には江戸時代から留萌場所の請負人であった栖原家の十一代角兵衛が留萌新市街地計画に賛同し、留萌、礼受、三泊三ヶ村共有資金として、畑地一万五千三坪の寄付を、また五十嵐綱治が所有地十三万坪の寄付を願いでたことにより、この計画が実現性のあるものとして道庁を動かしたからである。ちなみにこの願いでは明治二十四年九月二日に出されている。また、同年の十二月には留萌築港の請願が第二回帝国議会に提出された。

このようにやっとの思いで実行に移された新市街地造成計画であったが土地の抽選には明治二十三年から二十七年までかかった。等級は一等十二円、二等九円、三等六円、四等五円、五等四円の五等級で一戸分一区画七間半の二十五間であった。その他一般の区画のほか学校敷地や病院敷地なども確保されていた。

当然この市街地造成に伴う道路整備、排水溝の整備、橋の整備に多額の費用を必要とした。当初土地の区画の配当の時、その等級に応じて公共の施設整備費として寄付金を拠出するかたちになっていたが誰も寄付金を拠出しなかった。そのため、公共の施設整備については道庁の補助金にたよるしかなく、担当者の努力は並大抵のことではなかったらしい。この新市街地造成も明治二十七年終了することができ、留萌市街地開さく事務所も閉鎖した。

今年から留萌海岸ゴールデンビーチリゾート計画がスタートした。留萌の新しい町造りの元年にあたる。



天塩国留萌新旧市街全図

●特集 がんばっています留萌の農業

平成元年9月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・株式会社 留萌新聞社

人の動き　男16,366（減63）　・女17,162（（減68）　・合計33,528（減131）　世帯数12,770（減54）　7月末現在